新潟工科大学研究紀要　第6号　2001年12月

"I would I Had thy Inches!"
—*Antony and Cleopatra* についての一考察—

村上世津子*

(平成13年10月31日　受理)

"I would I Had thy Inches!": A Study of *Antony and Cleopatra*

Setsuko Murakami*

Many critics, including the characters in the play, admire Cleopatra. But when they do so, they almost always associate her with eroticism. Even those who regard Antony as a tragic protagonist rarely regard her as such. And some of those who acknowledge her nobleness in the end claim the discrepancy between her Circe-like character before Antony's death and her angelic character afterwards. However, when we scrutinize the play, we will notice her deep love for Antony behind her Circe-like character. In fact, she tries Antony because of her strong affection toward him. Therefore, when she feels his deep love through his death, she also dies for him, conquering her fear for death. Thus, despite the opinions of critics, she also is a tragic protagonist of the play.

key words: Antony, Cleopatra, love

はじめに

Antony and Cleopatra の批評は作品を「愛の賛歌」と見なすものと主人公の蕩逸性を強調して彼らには悲劇の主人公たる資格がないと主張するものに大別できる.前者の代表的な批評家は G. Wilson Knight と Dover Wilson である.Knight は"Human love is battered, weary, yet divine"[1]と述べている.また Wilson は"[Shakespeare] saw their sordidness, their self-indulgence and their meanness.... Yet in the end he lifts them on to the plane of high tragedy"[2]と主張している.他方,後者の代表的な批評家は Dickey と Traversi である.Dickey は"Antony and Cleopatra are examples of rulers who threw away kingdoms for lust"[3]と述べ,Traversi は,*Antony and Cleopatra* の結末は"the logical conclusion of an entanglement sought after and accepted, the end of a course which has been from the beginning both perverse and life-destroying"[4]だと主張している.

とはいえ,Danby[5] や L. J. Mills[6] のように Antony を悲劇の主人公と認めても Cleopatra はなかなか悲劇の主人公と認めたがらない批評家も多い.それどころか劇中のロ

* 英文学　助教授

一マ人に倣って彼女のことを"whore"[7]や"trull"(3.6.97)と見なす批評家が大半である.Cleopatraは"queen"であると同時に"quean"であるという批評家[8]も存在するほどである.先出のKnightやWilson以外にもCleopatraの魅力に言及する批評家は多いが,彼女の魅力はほとんど常に彼女の官能性とともに語られる.確かに中にはAntonyの"diversion"でしかない Cleopatra のやるせなさに光をあて,Antony の妻の地位への渇望が彼女をしてActiumの海戦でFulvia役を取らせたと主張するOrnsteinの見解[9]や女性は男性に劣るという伝統的な男性的な女性観がAntonyに悲劇の道を歩ませたというDashの見解[10]もある.またMackもCleopatraに対するAntonyの裏切りに言及している.[11]だがこれらは異色であり,"The world is lost to Octavius... for Cleopatra... by Antony"[12]とする見方が主流である.

しかしこの劇の題は*Antony and Cleopatra*であって*Antony*ではない.Shakespeareの劇ではふつう恋人同士の名が題名に並んで現れるときには主人公たちは「等しい権利」を持つ楕円の2つの中心の位置を占める.[13]しかも Shakespeare はこの劇を書くに際して題を主たる材源の題である"The Life of Antony"[14]から*Antony and Cleopatra* に変えている.その上この劇では Antony は4幕で死に,5幕は Cleopatra の独壇場である.なるほどSchucking[15]やMason[16]のように劇の終わりのCleopatraの高貴さは認めてもそれまでのCleopatra像との整合性を問題視する批評家もいる.しかし「威厳を備えた」演技がなされたときにCleopatraの死がほとんど確実に観客を魅了したことは上演史上に残る事実である[17].このことはClopatraが単にEveとMedusaとMadonnaのそれぞれが魅力的ではあるが別個の性質を兼ね備えている存在[18]にとどまらず,一個の人格を有したAntonyと対等の悲劇の主人公たり得る存在であることを示唆していないだろうか.本稿では Cleopatra に焦点を合わせて*Antony and Cleopatra*の悲劇を考察したい.

I

*Antony and Cleopatra*はAntonyの部下Philoが,Cleopatraとの情事に耽溺しているAntony を批判するところから始まる.Philo の批判の正当性を裏付けるように恋人たちの登場の第一声はAntonyののろけの言葉である.

Cleopatra: If it be love indeed, tell me how much.
Antony: There's beggary in the love that can be reckoned.
Cleopatra: I'll set a bourn how far to be beloved.
Antony: Then must thou needs find out new heaven, new earth (1.1.14-17)

Antony は Cleopatra にぞっこんのあまり Rome からの使者に会おうともしない.そしてAntonyの耽溺の頂点をなすのが次の言葉である："Let Rome in Tiber melt, and the wide arch/ Of the ranged empire fall! Here is my space!"(1.1.34-35) しかしAntonyにも"Roman thought"(1.2.88)が戻ることがある.理性を取り戻したときには使者の話に耳を傾

け,"strong Egyptian fetters"(1.2.122)を断ち切ろうと決心をする.そして Cleopatra に別れの挨拶に行くが,別れ話を切り出したときに Cleopatra にからまれて"Our separation so abides and flies/That thou, residing here, goes yet with me,/ and I, hence fleeting, here remain with thee."(1.3.104-106)という言葉で Cleopatra をなだめて出立しなければならないのを見るときに観客は Antony が Cleopatra の魅力を断ち切れないでいるのを感じる.だから Antony が Caesar の義姉 Octavia と結婚しても,観客はそれが Caesar と Antony を結びつける"cement"(3.2.29)になるというよりもむしろ友情の砦を打ち壊す"ram"(3.2.30)になるだろうという予感がする.Enobarbus の有名な Cydnus 川の Cleopatra の活写は Antony と Caesar の双方が Caesar の部下 Agrippa の提案を受けて Octavia と Antony の結婚を了承し,Caesar が Antony を義姉に引き合わせるために一同が退場した後でなされる：

The barge she sat in, like a burnished throne,
Burned on the water; the poop was beaten gold,
Purple the sails, and so perfumed that
The winds were love-sick with them; the oars were silver,
Which to the tune of flutes kept stroke, and made
The water which they beat to follow faster,
As amorous of their strokes. For her own person,
It beggared all description: She did lie
In her pavilion, cloth-of-gold of tissue,
O'erpicturing that Venus where we see
The fancy outwork nature. (2.2.201-211)

Venus をも凌ぐ美しさで見るものを魅了する Cleopatra が上陸すると Antony は使いをやり晩餐に招待するが,女王はその申し出を辞退し,自分の方が Antony を招待する.「たゆとう船の中にあって,アントニーの陸からの招待を断り,自分の方に誘う状況は…小島の岩の上で歌をうたい男を誘うあのサイレンたちのパターン」[19]を想起させることは言うまでもない.

その Cleopatra のサイレン像が前面に打ち出されるのが,Antony の破滅の契機となる Actium の海戦である.Antony は陸戦の名将であるのにその強みを自ら放棄して海戦の名将である Caesar 相手に海で戦おうとするのは"For that he dares us to't"(3.7.29)だからだと説明するが,観客は Antony が海戦に応じる背後に海の中に引きずるこもうとするサイレンとしての Cleopatra の影響力を感じる.Cleopatra がサイレンの性質をより明白に露呈するのは,戦闘の真最中に"when vantage like a pair of twins appeared/ Both as the same—or, rather, ours the elder"(3.10.12-13)である時に,帆を揚げて逃げ,それを見た Antony がたけなわの戦場を後にして Cleopatra を追いかけるときである.退却後 Antony は Cleopatra を激しく非難するものの,彼女の涙を見て裏切りを許す.しかし Cleopatra は

Antony の寛大な処置にも関わらず,Caesar の使者の Thidias が Antony を捨てて Caesar に従うなら厚遇するとの Caesar の言葉を伝えると,"I am prompt/ To lay my crown at's feet, and there to kneel/ Till from his all-obeying breath I hear/ The doom of Egypt"(3.13.79-82)と答えるばかりか,使者に自分の手に口づけまでさせて Caesar に寝返ったことを印象づける.Cleopatra が Thidias に口づけを許している現場を目の当たりにすると Antony は激怒する.だが,彼女の弁明を聞くとまたもや彼女を許して陸戦に向かい,勝利を収める.全編を通して武人としての Antony の凛々しさが前面に押し出されるのはこのときだけである.だがこの勝利は長続きしない.この後 Antony は再度 Caesar と海戦を交えて再度破れる.敗戦の原因はまたもや Cleopatra の裏切りにあると思う Antony は Cleopatra を痛罵して彼女に復讐することを宣言する.Antony の狂乱ぶりに恐れをなした Cleopatra は廟にたてこもり,"Antony!　Most noble Antony!"(4.14.30)という言葉を残して死んだと使者に言わしめる.使者の話を聞くと Antony の怒りはたちどころに消えて Cleopatra の後を追って自害しようとするが,死にきれずにもがき苦しんでいると Cleopatra が本当は生きているという知らせが届く.Antony はまたもや Cleopatra にだまされていたことを知るが,もはや彼女を非難しない.ただ死に神に"Of many thousand kisses the poor last/ I lay upon thy lips"(4.15.21-22)するだけの時間の余裕を願い,自分の死後の Cleopatra の身の上を案じ,今の自分の惨めな姿を哀れむのではなくて,世界の王者として君臨していた昔日の姿を思い起こして欲しいと言い,さらに自分は卑しい死に様をさらすわけでも臆病にも同胞に甲を脱ぐわけでもなく,"a Roman by a Roman/ Valiantly vanquished"(4.15.59-60)だと言って雄々しく死ぬ.

一方,Cleopatra は Antony の死に激しく心を揺さぶられ,"Noblest of men"(4.15.61)である Antony なき世界は"no better than a sty"(4.15.64)であるから早く Antony の後を追いたいと思う.そして何度も自殺を口にし,最後には実際に"fitting for a princess/ Descended of so many royal kings"(5.2.325-26)である方法で自害するが,彼女の死を聞いたときの Antony とは異なり Cleopatra は Antony の死の直後に彼の後を追い自殺するわけではない.それどころか瀕死の状態の Antony が Cleopatra に会うために廟に来たときに彼女は Caesar の捕虜になるのを恐れて降りていくことができない.それに Antony の死後に Caesar と会見する場面では Cleopatra が Caesar の妻 Livia や,義姉 Octavia に取りなしを頼むための贈り物を隠していたことが露見するが,これはもし Caesar に囲ってもらえるならば生き続けたいという気持ちの表出のように思われる.実際,Cleopatra は Caesar が彼女を凱旋の飾りにするかどうかに非常にこだわっていて,最終的に自殺の決意をするのは Caesar の部下の Dolabella から"Caesar through Syria/ Intends his journey, and within three days/ You with your children will he send before"(5.2.199-201)との情報を得た後である.

Antony and Cleopatra の行動をこのように見てみると,Antony については Cleopatra との恋に溺れて王国を失い,自らも破滅するが,その喪失と引き替えに寛大さや Cleopatra に対する思いやりを身につけ,最後には真の恋人にふさわしく雄々しく死んで行くから悲劇の英雄としての大きさを回復すると言えるにしても,Cleopatra については Antony の堕

落と成長の触媒的な存在でしかないという批評家諸氏の見解は妥当なように思われる.しかし,それなら威厳を備えた演技がなされた場合,Cleopatra の死がほとんど確実に観客を魅了したことはどう解決したらよいのだろうか.何故四大悲劇と異なり,女主人公が主人公の死後も生き続けるのだろうか.Leggatt が指摘するように Antony の死後も Cleopatra が生き続けることの意義は Antony の肉体は滅びても Dolabella に語る Cleopatra のセリフの中で"heroic Antony"に取って代わられることにあるのだろうか.[20]しかし Cleopatra に偉大さが備わっていなければ彼女への愛故に身を滅ぼす Antony の死は犬死になる.[21]これらの問題を解決するために次項以降では視点を Cleopatra に移し *Antony and Cleopatra* の行動を再度検討する.

II

Antony と Cleopatra の力関係に注目する E. A. J. Honigmann は劇の中程で二人の力関係が逆転すると指摘している.[22]なるほど開幕場面で"Let Rome in Tiber melt" と言うときの Antony はいかにも Cleopatra の尻に敷かれている感じがするし,Antony にそこまで言わせておきながら他方では Antony が Fulvia を妻としていながら愛していないことを冗談めかしてなじるのは Antony をもてあそんでいるような感じがする.そして別れの挨拶に来た Antony にからみ,焦らせ,出立の前に"Our separation so abides and flies/ That thou, residing here, goes yet with me,/ And I, hence fleeting, here remain with thee"(1.3.104-106)と言わしめるのは Cleopatra がその魅力の罠で Antony をからめ取っているような印象を観客に与える.

しかし,人は本当に自分が愛されていると感じているときに"If it be love indeed, tell me how much"(1.1.14)などと言うだろうか.相手が一時的に自分の元を離れることがあっても用事が済めば必ず自分のところに戻ってくることを確信しているときに執拗に相手を引き留めようとしたりするだろうか.なるほど Antony は"Let Rome in Tiber melt, and the wide arch/ Of the ranged empire fall! Here is my space!/ Kingdoms are clay"という最大限の言葉で愛を誓う.しかし Cleopatra が冗談めかして指摘するように,どんな愛の言葉をささやかれようとも Antony に Fulvia という妻が現存することは拭い去ることのできない事実なのである.一人の女性を妻としてめとりながら同時に別の女性を愛することができるだろうか.自分のそばにいるときには自分に愛を誓っていても,何か事が起これば自分は捨てられるのではないかという恐れが Cleopatra の潜在意識の中に存在しているから"You must not stay here longer; your dismission/ Is come from Caesar; therefore hear it, Antony./ Where's Fulvia's process?—Caesar's, I would say, Both?"(1.1.27-29)と言って Antony の反応に探りを入れると同時に策を弄して自分への愛を何とかつなぎ止めようとするのではないか.同様のことが,Antony が Cleopatra に別れの挨拶に来て「今度の帰国を安心して送ってもらえる」保証として告げる Fulvia の死に対する Cleopatra の言葉についても言えるのではないだろうか.

O most false love!

Where be the sacred vials thou shouldst fill
With sorrowful water?　Now I see, I see,
In Fulvia's death how mine received shall be. (1.3.63-66)

Cleopatraは冗談めかして言っているが,妻に対して不実なものが愛人に対して誠実たり得るだろうか.Fulvia の死が Antony に重みを持たなかったと同様に自分の死も軽んぜられるのではないかということは,Cleopatraが心底聞きたい問いだったのではないか？それでも最後には Cleopatra は Antony の帰国を認め,"Upon your sword/ Sit laurel victory, and smooth success/ Be strewed before your feet!"(1.3.101-103)という言葉で Antony を送り出す.

しかし2幕5場で使者が Antony と Octavia の結婚を告げるとき,Cleopatra の不安は現実となる.この場面で Cleopatra は使者の話になかなか耳を貸そうとはしない.そのため使者は「お聞き願えないでしょうか」と繰り返さなくてはならない："Good madam, hear me"(2.5.35); "Will't please you hear me?"(2.5.41)使者になかなか語らせず自分がべらべらしゃべる姿は軽薄に見える.その上 Antony と Octavia の結婚を聞いたときには理性を失い逆上する.使者にさんざん暴行を加えた後で気が少し静まると Cleopatra は使者を呼び戻し,Octavia の容姿を語らせる.使者は先刻事実をありのまま述べて Cleopatra から手痛い目に遭わされたので本当のことを語る気は失せているし,Cleopatra 自身も実際の Octavia の姿を知りたいと思っているわけではなく,Octavia は大した人物ではないから Antony の愛が持続するはずはないという答えを引き出したいと思っているし,侍女の Charmian も幇間よろしく Cleopatra の方がはるかに Octavia より優れていると言って Cleopatra を持ち上げる.かくして三者の協力で"This creature's no such thing"(3.3.40)という結論を引き出し,その結論に満足した Cleopatra はこの場面の終わりにはすっかり平静を取り戻す.しかし"Hath he seen majesty?　Isis else defend,/ And serving you so long!"(3.3.42-43)という Charmian の言葉と裏腹に,この場面の Cleopatra は観客には滑稽に映るだけで女王としての威厳からはほど遠い.

次に Cleopatra が登場するのは Caesar との戦闘に Cleopatra が出陣することの是非について Enobarbus と口論しているときである."[Antony's] mariners are muleteers, reapers, people/ Engrossed by swift impress.　In Caesar's fleet/ Are those that often have 'gainst Pompey fought"(3.7.35-37)にもかかわらず Antony が海戦を選ぶのは "[Caesar] dares us to't"(3.7.29)だからだと Antony は答えるが,この選択に水と結びつきの強い Cleopatra[23]の影響があることは言うまでもない.Enobarbus の反対にも関わらず「男として」出陣し Antony の苦手な海戦を敢えて選ばせて戦闘の真最中に「臆病風に吹かれて」逃げ出すのは Antony 軍を敗戦に導く行為以外の何でもない.しかも Cleopatra は遁走の理由を「臆病風に吹かれて」と説明しているが,宣言はしたものの,いざ出陣の壇になると足がすくんだとか,出陣したもののいざ敵の姿を間近に見ると怖くなったとか,敗戦の色濃くなってきたので怖くなったというのではなくて「いずれが優勢か双子のように五分と五分,というより,むしろこちらが優勢と見えたとき」に背走したことには何か Antony 軍を

なんとしても負けさせたいという意図的なものが感じられる.恋人にこれだけ壊滅的な敗北を喫させた後に3幕3場でCaesarの使者ThidiasがAntonyを捨てCaesarに従うならCaesarは女王を厚遇するとの知らせを伝えたときにCleopatraが"I kiss his conqu'ring hand. Tell him I am prompt/ To lay my crown at's feet"(3.13.79-80)と答え,使者がCleopatraの手に口づけすることを許すことはAntonyに対するこの上もない背信行為であり,ここにサイレンとしてのCleopatraの真骨頂が発揮されているように見えることは前述した通りである.対するAntonyはCleopatraに裏切られる度に激怒はしつつも寛大さを身につけているから,劇の半ば頃を境にAntonyとCleopatraの力関係は逆転するというHonigmannの指摘は的を射ているように思える.しかし何故Cleopatraはこれほどまでに恋人を裏切り続けるのだろうか.

III

CleopatraはAntonyが帰国したら自分は捨てられるのではないかという危惧を抱きながらも"Our separation so abides and flies/ That thou, residing here, goes yet with me,/ And I hence fleeting, here remain with thee"(1.3.104-106)という言葉を信じてAntonyを送り出した.そして"You think of him too much"(1.5.7)という侍女のCharmianの進言にも関わらずにただひたすら恋人のことだけを考えて暮らしており,他に何をしても身が入らない有様である.またAlexasに"Why do you send so thick?"(1.5.66)といぶかしがられても,たとい"unpeople Egypt"(1.5.81)することになっても,毎日Antonyに手紙を送り届けたいと思っている.Antonyを信じ,それほどまで熱い思いを抱き続けた報いがAntonyとOctaviaの結婚の知らせである.Cleopatraが打ちのめされたのも道理である.Cleopatraが使者になかなか話の核心に触れさせようとしないことが使者登場の場面を滑稽だと感じさせる一因になっていることは先述した.だが,Shakespeareの劇においては滑稽に見えることと,だからおもしろおかしく笑い飛ばしたらしまいということとが必ずしもイコールの関係で結ばれないことは,Macbethの門番の場面で明らかである.同様にこの場面もおかしいから笑ってそれでおしまいというわけにはいかない.CleopatraはAlexasが良い知らせを持ってきたときにはすぐに話の核心に入らせている.それに対してこの劇の最初でAntonyが別れの挨拶に来たときにはAntonyにからみついてなかなか彼に用件を切り出させようとはしなかった.とするならば,ここでCleopatraが使者になかなか用件を切り出させないで滑稽とも思えるほど饒舌になるのは,使者が悪い知らせを持ってきたことを本能的に感じ取っていて本当のことを聞くのが恐ろしいからではないか.1幕2場でRomeからの悪い知らせを持ってきた使者が"The nature of bad news infects the teller"(1.2.101)であると言ってなかなか用件を切り出せないでいるときにAntonyは"Who tells me true, though in his tale lie death,/ I hear him as he flattered"(1.2.104-105)と答え,その答えの通り使者を遇した.Cleopatraが使者になかなか用件を切り出させようとせず,使者がやっとの思いで真実を伝えると悪い知らせに祟るのは,Antonyの態度と対照的であることは言うまでもない.しかしいかにAntonyがCleopatraへの愛を誓っても,Fulviaは別にしてもAntonyにはもう一つ使えるべき対象—Rome—があった.そしてEgyptの

足かせを捨てなくてはならないというのは外からの声だけでなく,Antony 自身の中に存在する理性の声でもあった(1.2.122-23).それに対し,過去にどんな愛人がいようとも現在の Cleopatra にとっては Antony がすべてである.1 幕の Antony にとって Cleopatra は捨てなければ破滅する存在であったが,2 幕 5 場の Cleopatra にとっては Antony に捨てられることは彼女の世界が崩壊することを意味している.だから Antony 結婚の知らせを告げられたときにこれほど荒れ狂うのである.

手ひどい仕打ちを加えた使者を呼び戻して Octavia の姿について虚偽の報告をさせる場面についても同様のことが言える.なるほど Cleopatra と使者と Charmian の 3 人で「大した女ではない」Octavia 像を作り上げ,その像に満足して使者に先般の手荒な仕打ちを詫び,今し方悪態をついていた使者をほめることは滑稽そのものである.しかし"If Cleopatra will not take herself seriously, how can we?"[24]と言うのは早計ではないだろうか.つまり Shakespeare は Cleopatra の滑稽性を描写するためだけにこの場面を創作したのではなく,滑稽な態度を取らざるを得ない Cleopatra の心境を呈示しようとしているのではないか.Antony の結婚の知らせに打ちのめされたときに Cleopatra は"Let him for ever go!"(2.5.115)と言うが,その後すぐ"Let him not, Charmian./ Though he be painted one way like a Gorgon,/ The other way's a Mars"(2.5.115-117)と言い直している.この言い直しは,Octavia と結婚して自分を奈落の底に突き落とした Antony なんかとは別れたいと思いつつも,あまりにも強く Antony にひかれているので理性のたがが全く利かないことの認識を表しているのではないか.別れたくても別れられないから心の平静を取り戻すためには Antony は自分の元に帰ってくるという結論を導き出さなくてはならない.そしてそのためには Octavia は大した女でないという結論をでっち上げなくてはならないのではないか.

ここで難問が残っている.Cleopatra の Antony に対する愛がそれほど一途なものだというならば何故自分の元に帰ってきた Antony に Actium の海戦で惨敗を喫させるように仕向けるのかという疑問である.この戦いのさなかに Cleopatra が逃げるのは単に怖くなったからではなくて Antony に大敗を喫させようとする明確な意図が感じられることはすでに述べたが,Cleopatra がこのような態度に出るのは Antony による度重なる裏切り—Fulvia の存在,Antony の帰国,Octavia との結婚—を経験して Antony の自分に対する気持ちを確かめたいと思ったからではないか.開幕場面では"Let Rome in Tiber melt, and the wide arch/ Of the ranged empire fall!　Here is my space"という言葉を引き出すだけで十分であった.別れの挨拶に来たときでも"Our separation so abides and flies/ That thou, residing here, goes yet with me"という言葉を信じることができた.しかし Octavia との結婚は Cleopatra の信頼を根底から崩し,言葉は空疎なものに過ぎないことを見せつけた.もはや言葉で愛を確かめることはできないから大博打を打ったのではないか.海戦で Antony 方が大敗を喫した後で Antony と Cleopatra は次のような言葉をかわす.

Cleopatra:　　O, my lord, my lord,
Forgive my fearful sails!　I little thought

You would have followed.
Antony: Egypt, thou knewst too well
My heart was to thy rudder tied by th' strings
And thou shouldst tow me after. O'er my spirit
Thy full supremacy thou knewst, and that
Thy beck might from the bidding of the gods
Command me. (3.11.54-61)

Wilders[25]ら大多数の批評家はここでの Antony のセリフを額面通りに受け取っているが Antony のセリフは本当に真実を語っているだろうか.Cleopatra のセリフに嘘が混じっていることは確かだが Antony の言葉も正しくはない.Antony の心が本当に"thy rudder tied by th' strings"であると感じていたならば Cleopatra はこんな大博打を打ちはしなかったであろう.Cleopatra はよくサイレンに喩えられるが [26]サイレンと決定的な違いがある.サイレンは美しく甘い歌声で船乗りを誘い,彼らの船を難破させても自身は無傷でいられるが,途中で逃げるにしても戦いの費用を彼女自身が分担し(3.7.16),彼女自身も出陣している以上,Antony 方の運命が彼女の運命を巻き込むことは必定だからである.彼女自身をも破滅させる可能性が大であるにもかかわらず,このような暴挙に出ることは,それだけ Antony の心を確かめたいという Cleopatra の気持ちが切実であったことを物語っていると言えよう.

とはいえこれで問題が片づいたわけではなく,むしろこの後にさらなる難問が待ち受けている.Antony がたけなわの戦場を後にし,自分についてきて大敗を喫したのを確認し,しかもはじめは Cleopatra の行動を激しくなじりはしたものの涙を流して謝る姿を見て "Fall not a tear, I say; one of them rates/ All that is won and lost"(3.11.69-70)と言って許す寛大さに触れた後で何故さらに Antony を奈落の底に突き落とす行為をするのか,つまり Caesar の使者に"I kiss his conqu'ring hand. Tell him I am prompt/ To lay my crown at's feet"と答え,使者が彼女の手に口づけすることまで許すのかということである.次の Cleopatra のセリフにもかかわらず Granville-Barker[27]をはじめとする多くの批評家は Cleopatra のこの行為を Antony に対する裏切りだと断定している.

Not know me yet? (3.13.162)

Ah, dear, if I be so
From my cold heart let heaven engender hail
And poison it in the source, and the first stone
Drop in my neck; as it determines, so
Dissolve my life! (3.13.163-67)

この劇の中でこれまで Chorus 役をしてきた Enobarbus が"sir, sir, thou art so leaky/

That we must leave thee to thy sinking, for / Thy dearest quit thee"(3.13.67-69)と言っていることは Barker の見解を裏付けているように思える.しかし Enobarbus の判断が絶対とは言えないことは,後に Antony を裏切り Caesar 方に寝返った Enobarbus が Caesar の冷徹さと対照的な Antony の寛大さに触れたときに己の行為を悔い,頓死することから明らかである.むしろ重要なことは,Caesar の使者が人払いを求めたときに Cleopatra が "None but friends. Say boldly"(3.13.50)と答えていることである.[28]つまり Cleopatra は Thidias とのやりとりを Antony の従者たる Enobarbus に聞かせているのである.なるほど Enobarbus は途中で退席する.しかしそれは Cleopatra の裏切り（と彼には思えた）を主人の Antony に知らせるためであり Cleopatra に退席を求められたからではない.別れの挨拶に来たときの Antony や Octavia との結婚を告げにきた従者の姿を見て,彼らが口を開く前から悪い知らせを察知するほど勘が鋭い Cleopatra のことである.当然,Enobarbus が途中で退席したことに気づいたであろうし,その目的が何であるかも予測できたであろう.ふつう,人は裏切ろうとする相手の関係者がいるところで裏切り行為を行いはしない.本気で裏切るつもりなら人払いをするはずである.とするならば,ここでの Cleopatra の行為は裏切りというよりも裏切る素振りをして Antony に奈落を経験させることが目的なのではないか.

Cleopatra は Actium の海戦の後で Enobarbus に敗戦の責任は彼女にあるのか,それとも Antony なのかを尋ねて"Antony only"(3.13.3)という答えを得ている.彼女は３幕１１場で背走を謝り Antony の許しを得ている.それなのに何故その後で Enobarbus に敗戦の責任者は誰かと問うのだろうか.Cleopatra と Thidias のやりとりがこの後に行われることを考えるならば,Enobarbus との会話は Thidias に対する Cleopatra の行為を解釈する鍵になるのではないだろうか.Cleopatra のあからさまな裏切り（と Antony は思う）を目の当たりにして Antony は心の均衡を失い,使者を激しく鞭打たせ,Cleopatra を罵倒する.Antony のこの荒れ狂い様が Octavia との結婚を知ったときの Cleopatra の荒れ方に似ていることは Schanzer[29]の指摘を待つまでもないが,Cleopatra が Antony に気づいて欲しかったのはまさにその時の彼女の思いだったのではなかろうか.不倫の現場を目撃した（と思えた）時 Antony は"a morsel, cold upon/ Dead Caesar's trencher"(3.13.121-22)や"a fragment / Of Gnaeus Pompey's"(3.13.122-123)と言って Cleopatra を罵倒する.Cleopatra が Julius Caesar や Gnaeus Pompey 等と関係があったことは彼女自身が認めるところである(1.5.30-33).しかし彼らは過去の人物であって今の彼女の恋人は Antony しかいない.それに対して Antony は Cleopatra と出会ったときには Fulvia という妻がいたし,緊急事態が生じたから帰国するが妻は死んだので安心して送り出してくれと言われて了承したら Octavia と結婚をした.Cleopatra は Antony に,なるほどあなたは Actium の海戦でたけなわの戦場を後にして私を追いかけてくれました.そして私の涙を見て私の裏切りを許して下さいました.その一方であなたは"Whither hast thou led me, Egypt?"(3.11.51)や"Thy beck might from the bidding of the gods/ Command me"(3.11.60-61)など,私のせいで負けたことに非常にこだわっていました.でも敗戦の責任は私だけにあるのですか.あのとき踏みとどまるという選択もできたのではないのですか？それともあのとき私を追いかけて

下さったのは一時の熱に浮かされただけで,本当は私のことは大して重要でなかったのではないですか.女は男よりも背が低い分,女には心がないとお考えですか.あなたに裏切られるたびに私は今あなたが嘗めている思いを味わってきたのですよと訴えたいのではないか："I would I had thy inches! Thou shouldst know / There were a heart in Egypt!"(1.3.41-42)[30]

IV

Antony 方は Actium の海戦で惨敗を喫した後,陸戦でつかの間の勝利を得るものの,その後の海戦では再び敗北する.Antony は敗因を Cleopatra の裏切りに帰すがテキストはこの点については明確でない.だからこの点に関する筆者の見解はあくまで憶測に過ぎないが,Cleopatra は既に Antony に奈落の体験をさせているのでこれ以上裏切らなくてはならない理由はないし,この海戦以前にすでに Alexas や Canidius 一派のみならず"one ever near thee"(4.5.7)であった Enobarbus までもが寝返っていたことを考えると,敗因は Cleopatra の裏切りとは無関係なのではないか.Thidias に口づけを許したときよりもさらに荒れ狂う Antony を見て怖じ気をなした Cleopatra は廟に立て籠もり従者に命じて彼女が自害したと Antony に伝えさせる.結局この裏切りが Antony の命取りになるのだが,これは Actium の戦いのさなかの逃走や,その直後に Thidias に口づけを許したときの裏切りとは性質を異にする.Actium の逃走が Cleopatra を取るか戦争を取るかの選択を突きつけ,Thidias に口づけを許すことが恋人を選んだ Antony に恋人の裏切りを見せつけることによって奈落の体験をさせることを目的としていたのに対して,廟に閉じ籠もることは Antony に苦痛を与えることを本来の目的としていないからである.

使者にいまわの際に悲しげに"Antony"とつぶやいて自殺したと伝えさせて Antony の受け止め方を知らせるように命じることは,Cleopatra が Antony の苦しみを高見から見物して楽しんでいるような印象を観客に与えることは否めない.そしてこの印象は Cleopatra がまだ生きていることを知った Antony が今生の別れの挨拶のために従者に担がれて彼女の廟まで来たときの Cleopatra の応対の仕方に引き継がれている.Cleopatra は Caesar に捕まることを怖れて下に降りられずに逆に Antony を引き上げようとするが,このときの彼女のセリフ,"Here's sport indeed! How heavy weighs my lord!"(4.15.33)は 2 幕 5 場で語られる魚釣りを想起させておかしみを誘う.しかし"Antony"という言葉をつぶやいたと言わせたり,Antony の受け止め方を伝えさせたりするなどの脚色を施してはいるものの,廟に行き,錠を下ろし死んだと伝えさせるという発想は助けを求めてきた Cleopatra のために Charmian が考案したものである.そして遅すぎはしたものの虚偽報告が引き起こす事態を心配してすぐに使者を送って真相を説明させたことから判断すれば,このたびの Cleopatra の行動の動機が Antony の怒りを静めるために企んだものであったという使者を通じての彼女の弁明(4.14.124-126)に嘘はないだろう.

この箇所以降,Antony に奈落を体験させた激しさに代わって Cleopatra の弱さが随所で顔をのぞかせる.廟まで担がれてきた Antony を引き上げるときの彼女のセリフ"Here's sport indeed! How heavy weighs my lord!"はおかしみを誘う一方で,かつての楽しかっ

たときとの対比は現在の変わり果てた状況を強調する.Actium の戦いで Antony に愛か名誉かの選択を突きつけたのは Cleopatra であった.それに対してここでは Cleopatra が "honour"か"safety"かの選択を突きつけられている.ただし以前の Cleopatra と異なり,Antony は選択を強要しない.反対に"Of Caesar seek your honour with your safety"(4.15.48)することを忠告する.しかし Cleopatra はその2つが両立しないことを知っている："They do not go together"(4.15.49).そして"honour"つまり Antony の死に殉じること,を選ぶと明言する："My resolution and my hands I'll trust"(4.15.51). Cleopatra は死にゆく Antony を前にしてそう断言するだけでなく,Antony の遺体を前にしたとき(4.15.84-86;同 90-91)や,Caesar の使者 Proculeius との会見の直前(5.2.4-8)にも死を口にしているし,Proculeius との会見中にローマの兵士たちが突入して Cleopatra を生け捕りにしようとしたときには短剣で自害しようとする試みを Proculeius に阻止されている.短剣を奪われた後は"Sir, I will eat no meat, I'll not drink, sir;/... I'll not sleep neither./ This mortal house I'll ruin"(5.2.48-50)と言うし,Cleopatra を Dolabella に任せて引き上げる Proculeius に頼む Caesar への言伝でも"I would die"(5.2.69)と答えていることから判断すれば Cleopatra の死にたいという気持ちは単なる気まぐれではなくて一貫性があるように思われる.しかしその一方で Cleopatra は最後まで生への執着が断てない.Antony の死の直後に Caesar の意向を伺うために使者を送っているし(5.1.52-6), Antony に対する気持ちを印象づけることによって心を引きつけた Dolabella から彼女に対する Caesar の処遇を聞き出そうとする(5.2.105-109)し,Caesar と対面する場面では Cleopatra が Caesar の妻や義姉に取りなしを頼むための贈り物を隠していたことが召使いの Seleucus によって暴露される.[31]結局 Cleopatra が最終的に自害する決意を固めるのは Dolabella が"Caesar through Syria / Intends his journey, and within three days/ You with your children will he send before"(5.2.199-201)という情報を伝えてからである.Antony の死の直後には彼なき世界は"no better than a sty"(4.15.64)であり,生きていく価値がないから死にたいと言っていた.また,自害するために毒蛇を胸に当てる直前には"Methinks I hear Antony call"(5.2.282-3)や"Husband, I come!"(5.2.286)と言って彼女の死が Antony への殉死であることを観客に印象づけている.しかし最終的な決断をするのは生きていても Caesar の凱旋の飾りものになるに過ぎないことが明白になってからである.一体 Cleopatra の死は Antony への殉死なのだろうか,それともさらしものになるのを避けるための利己的なものなのだろうか.

"No more but e'en a woman"(4.15.77)で始まる Antony の死の直後の Cleopatra のセリフは独白ではない.しかしこれは気を失って倒れた Cleopatra が意識を取り戻したときの第一声で,他者に聞かせることを目的としているというよりもつぶやきであるという点において独白に近い性質を持っており,ここで語られる殉死への願望は信憑性がある.それにもかかわらず Cleopatra が最後まで Caesar の元で生きながらえる可能性を探り続けるのは死の恐怖を拭い去れないからではないか.Cleopatra の死について侍女の Charmian は "It is well done, and fitting for a princess/ Descended of so many royal kings"(5.2.325-26)と言う.実際,死に臨んで Cleopatra はローブと王冠を身につけて盛装しているし,"I am

fire and air; my other elements/ I give to baser life"(5.2.288-89)という高尚な言葉を口にしてもいる.しかしここまで決意が固まり,準備万端整って後は胸に毒蛇をあてがうだけとなっても,そうするには Iras に対する嫉妬の最後の一突きが必要であった："If she first meet the curled Antony,/ He'll make demand of her, and spend that kiss/ Which is my heaven to have"(5.2.300-302). Cleopatra は"The stroke of death is as a lover's pinch/ Which hurts and is desired"(5.2.294-95)と言う.また毒蛇を赤子に,自分を乳母に喩え,"Dost thou not see my baby at my breast/ That sucks the nurse asleep?"(5.2.308-309)と言う.これらのセリフは明らかに死をエロチックなものと見なすものである.そして Cleopatra の死体を前にして言う Caesar のセリフ"she looks like sleep,/ As she would catch another Antony/ In her strong toil of grace"(5.2.345-47)は Cleopatra の死体に漂うエロチシズムを追認している.しかし,どんなに美しく見えても,まもなく蛆虫が"blow [her] into abhorring"(5.2.59)である事実を消し去ることはできない.Antony なき世界は卑しいから死にたいと願いつつも他方では最後まで Caesar の庇護の元で生きながらえる可能性を画策し続けるのは,この死の厳然とした事実に屈せざるを得ないからではないか.Charmian と Guard に繰り返し指摘されることによって Cleopatra の王冠が曲がっていたことが観客に印象づけられる：

> Your crown's awry. (5.2.317)
>
> I found her trimming up the diadem
> On her dead mistress. (5.2.341-42)

Cleopatra の王冠が曲がっていたことは,ローブと王冠で盛装し,"My resolution's placed, and I have nothing/ Of woman in me. Now from head to foot/ I am marble-constant"(5.2.237-39)という勇ましい言葉を吐き,"As sweet as balm, as soft as air, as gentle"(5.2.310)という強がりを言っても,Ornstein[32] や Jones[33] の指摘と異なり,Cleopatra の死は"life"を"art"に変えるというきれい事では片づけられない側面を持っていた,つまり Cleopatra は死の瞬間まで死の恐怖と戦わなければならなかったことを示唆しているのではないか.

Antony の死後,彼の後を追いたいと願いつつも死の恐怖故に逡巡し,結局彼女が最終的に自害を決断するのは Caesar が彼女を見せ物にするのは確実だと知ってからである.しかしたとえ土壇場に追い込まれてからであろうと,死の恐怖と対峙し,それを乗り越えている点において Cleopatra は Antony と対等の悲劇の主人公としての偉大さを獲得していると言えるのではないか.

結び

Cleopatra の魅力は恋人の Antony によってだけでなく,Enobarbus によっても語られているし,劇の最後では彼女を死に追い込んだ Caesar までが彼女の美しさに言及している.

彼女の魅力が劇中人物だけでなく多くの批評家を引きつけてきたことは言うまでもない.しかし彼女の魅力は常に官能性とともに語られてきて,彼女の魅力を認める者も,彼女が一個の人格を持った Antony と対等の悲劇の主人公たり得る人物だということはなかなか認めてこなかった.彼女の死に高貴さを認めても Antony の死の前後で Cleopatra の像に齟齬があると指摘する批評家が存在するほどである.だが,この劇を詳しく検討するならば4幕までの Cleopatra のサイレン性の背後にはサイレンとはもって異なる恋人への真摯な思いが存在することがわかる.そしてこの思いが彼女をして恋人を試させる.だから恋人の死と引き替えに,彼の真実の愛に触れた後は彼女自らが死の恐怖と戦い,土壇場でその恐怖に打ち勝ち,悲劇の主人公としての偉大さを獲得して死んでいく.かくして批評家たちの見解と異なり Cleopatra は悲劇の主人公たる大きさを持つ人物であると言えよう.

注

1) G. Wilson Knight, *The Imperial Theme* (1951; London: Methuen, 1979) 325.
2) Dover Wilson, *Six Tragedies of Shakespeare* (London: Longman,1929) 61.
3) Franklin M. Dickey, *Not Wisely But Too Well* (San Marino: Huntington Library, 1957) 179.
4) Derek Traversi, *Shakespeare: The Roman Plays* (London: Hollis & Carter, 1963) 169.
5) John F. Danby, *Poets on Fortune's Hill* (London: Faber and Faber,1952) 146.
6) L. J. Mills,"Cleopatra's Tragedy," *Shakespeare Quarterly* 11 Spring 1960: 161.
7) *Antony and Cleopatra*, ed. John Wilders (London: Routledge, 1995) 3幕6場68行. 以下 *Antony and Cleopatra* からの引用はすべてこの Arden 版により本文に幕,場,行を記す.
8) Maurice Charney, *Shakespeare's Roman Plays* (Cambridge: Harvard U. P, 1961) 114-15.
9) Robert Ornstein, "The Ethic of the Imagination: Love and Art in 'Antony and Cleopatra,'" *Later Shakespeare*, ed. J. R. Brown and Bernard Harris (London: Edward Arnold, 1966) 43.
10) Irene Dash, *Wooing, Wedding, and Power: Women in Shakespeare's Plays* (New York: Columbia U. P, 1981) 225.
11) Maynard Mack, "Antony and Cleopatra: The Stillness and the Dance," *Shakespeare's Art*, ed. Milton Crane (Chicago: U of Chicago, 1873) 81.
12) Marilyn French, *Shakespeare's Division of Experience* (New York: Summit Books, 1981) 254-55.
13) M. W. MacCallum, *Shakespeare's Roman Plays and their Background* (1910; London: Macmillan, 1967) 341.
14) Wilders, introduction, *Antony and Cleopatra*, 38.
15) Levin L. Schucking, *Character Problems in Shakespeare's Plays* (1922;

Gloucester: Peter Smith, 1959) 134.

16)H. A. Mason, *Shakespeare's Tragedies of Love* (London: Chatto & Windus, 1970) 276.

17)John Russell Brown, introduction, *Shakespeare: Antony and Cleopatra* A Casebook (London: Macmillan, 1968) 16.

18)Knight, 300.

19)今西雅章『陰翳と変容のドラマ』(東京：研究社,1991) 214-15.

20)Alexander Leggatt, *Shakespeare's Political Drama* (1988; London: Routledge, 1990) 181.

21)David Bevington, introduction, *Antony and Cleopatra* (1990 ; Cambridge: Cambridge U.P, 1995) 27.

22)E. A. J. Honigmann. *Shakespeare: Seven Tragedies* (London: Macmillan, 1976) 158.

23)Michael Neill, introduction, *The Tragedy of Anthony and Cleopatra* (Oxford: Oxford U. P, 1994) 85.

24)Bevington, 21.

25)Wilders, 2.

26)George Bernard Shaw, *Three Plays for Puritans* (1900; London: Constable, 1947) xxvii.他

27)Harley Granville-Barker, *Prefaces to Shakespeare* (London: B. T. Batsford, 1972) 393.

28)Dash, 226.

29)Ernest Schanzer, *The Problem Plays of Shakespeare* (London: Routledge & Kegan Paul, 1963) 136.

30)Wilders (Arden 注 p.109)と Bevington (Cambridge 注 p.96)はともに"heart"に"courage"という注をつけている.しかしこの"heart"には"courage"という意味とともに"the function of feeling"(*OED* sb. 5a)という意味もかけられているのではないか.

31)Goddard [Harold C. Goddard, *The Meaning of Shakespeare*, 2vols, (Chicago: U of Chicago P, 1951) 2: 201.]や Wilders(286)らは Seleucus による暴露は生き延びたいと思わせて Caesar を欺くために,あらかじめ打ち合わせがされていた演技だと解釈している.しかし Dolabella が Caesar の動向の最終確認情報を与えて Cleopatra が礼を言うのはこの後であることを考慮すれば,ここで贈り物を隠していたのは Cleopatra が Caesar の庇護下で生きる可能性を最後まで探っていたことの現れであると解釈するほうが自然ではないか.

32)Ornstein, 45.

33)Emrys Jones, introduction, *Antony and Cleopatra* (London: Penguin Books, 1977) 42-43.